

# インドネシア写本保存共有プロジェクト

Indonesian Manuscripts Project: Field-Research, Cataloguing and Digitalization

菅原由美 SUGAHARA Yumi

(天理大学・専任講師)

---

## 1. パレンバン写本

2003年より、インドネシア、スマトラ島南部の都市パレンバンにて、インドネシア写本協会 (Yayasan Naskah Nusantara: YANASSA) 及びインドネシア写本学会 (Masayarakat Pernaskahan Nusantara: MANASSA) パレンバン支部の協力のもとに、同地に残る古文書の調査・カタログ作成・デジタル化作業をおこなっている。インドネシアでは、写本研究を専門に行う文献学者 (philologist) が写本学会を形成し、各地にその支部が存在するが、地域によってかなり専門家の数に偏りが見られる。パレンバンにおいても文献学者の数が大変少なかったため、今回の調査およびカタログ作成は、MANASSA ジャカルタ支部メンバーが中心となって結成した YANASSA が中心となっており、その後デジタル化作業については、写本の所有者の協力のもとに、MANASSA パレンバン支部が中心となって作業をすすめた。YANASSA は主にインドネシア大学文化学部 (Universitas Indonesia, Fakultas Ilmu Budaya) 講師陣から構成され、パレンバン側は主にシュリーウィジャヤ大学 (Universitas Sriwijaya) 講師陣から構成されている。

インドネシアでは、ジャワ島においては王宮を中心に、豊かな写本コレクションが存在し、オランダ植民地時代より研究も盛んに進められてきた。現在も、オランダやイギリスの図書館に保管されている以外に、ジャカルタの国立図書館やジョクジャカルタの王宮博物館などに多くの写本が保管され、研究者によるアクセスも比較的容易である。しかし、ジャワ以外の島で執筆された写本の場合、海外やインドネシアの図書館に保管されている写本はジャワのものに比べ、少数である。写本のほとんどは現在も民間に保管されており、所在場所の情報が限られているため、研究者によるアクセスが難しい。そのために研究があまり進められてきていない。その上、こうした古文書の多くは、湿潤な気候環境や保存対策不足のために劣化し、また時には売買の対象となり、散逸の危機に瀕している。スマトラ島においても同様の状態にある。今回はじめて、パレ

ンバンに散在する写本の調査が試みられたが、刻一刻と写本の状態は悪くなっていくように見受けられた。

パレンバンには、7～8世紀頃マレー半島からスマトラ島周辺に台頭したシュリーヴィジャヤ（室利仏逝）帝国の都の一つが存在したと考えられており、多くの史跡が出土している。18～19世紀にパレンバンはイスラーム学を積極的に奨励し、中東から多くのウラマー（宗教学者）を招聘し、宗教によるクニの再建を目指した。その結果、アブドゥサマッド・パレンバーニー（Abdussamad Palembani）などの多くの著名なウラマーが輩出され、彼らの著作のなかには東南アジア・イスラーム圏に広く流通するものも生まれた。また、いわゆるウラマー・ジャウィと呼ばれる東南アジア・イスラーム圏のウラマー達が執筆・翻訳した書籍もパレンバンで多く写本あるいは翻訳され、流通していた。このことから、この地域に写本が多く眠っていることは知られていながら、調査は進められていなかった。

YANASSAの調査によれば、パレンバン出自が明らかである写本は、現在、オランダのレイデン大学図書館（Universiteit Leiden）に65点のスルタン・バダルディン（Sultan Badaruddin）コレクションがある他には、ジャカルタのインドネシア国立図書館（Perpustakaan Nasional R.I.）に約45点のコレクションが保管されているのみである。他地域に比べ、この数は非常に少ない。オランダ植民地時代に写本収集がこの地域の政府によって積極的には進められなかったことが原因であると考えられる。本調査で発見した写本は250点で、パレンバンにあるすべての写本でないことは明らかであるが、同地での写本調査の第一歩として位置づけることが可能であり、また、ジャカルタ等に保管されている写本の多くは出自が不明であるため、今回のように出自が明らかな例は写本研究の上で非常に重要である。

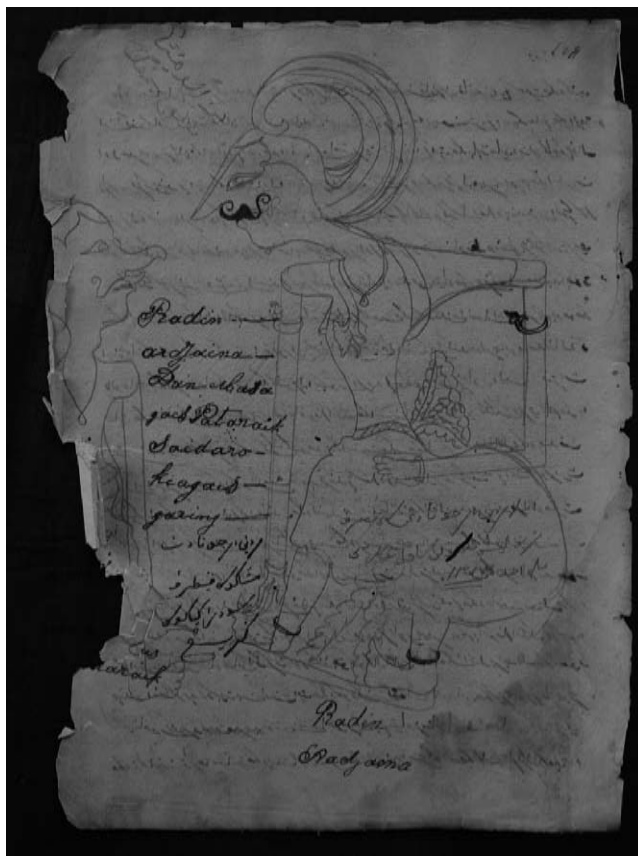
今回の調査が可能になったのは、インドネシア大学の文献学を専攻している学生にパレンバン出身者がおり、彼女の情報から写本所有者の所在が明らかになったためである（彼女自身の家系にも古くから写本が伝わっていた）。その情報をもとに、YANASSAが2002年にパレンバンを訪れ、下見調査をおこなった。その後、2003年7月に1週間、調査チームがパレンバン入りし、調査・記録収集をおこなった。チームはジャカルタから8名、パレンバン側から4名、東京から1名の計13名により構成されていた。現地側の情報をもとに、写本を所有している民家を訪ね、記録の収集と写真撮影をおこなった。このときの調査手法は、インドネシアの文献学者がこれまでの調査で培ってきた手法を採用したが、ジャカルタでも資料読解をすすめられるように、デジタル・カメラを使った写本の撮影も同時におこなわれた。主な収集データとして、タイトル、言葉、文字、ページ数、1ページごとの行数、ページのつけ方、写本の大きさ、テキスト部分の大きさ、紙の種類、韻文・散文、製本の種類、すかし、インクの色、絵の有無、写本の状態、執筆者あるいは筆記者の名前、年月日、場所、文章の最初と最後の部分、コロフォンの情報、別バージョンまたは出版の有無などが挙げられた。

また、写本所有者の名前、住所のほか、家系や写本の由来などの情報を、インタビューを通じて収集した。本調査で訪問した写本所有者は13名である。特に多くのコレクションを所有し

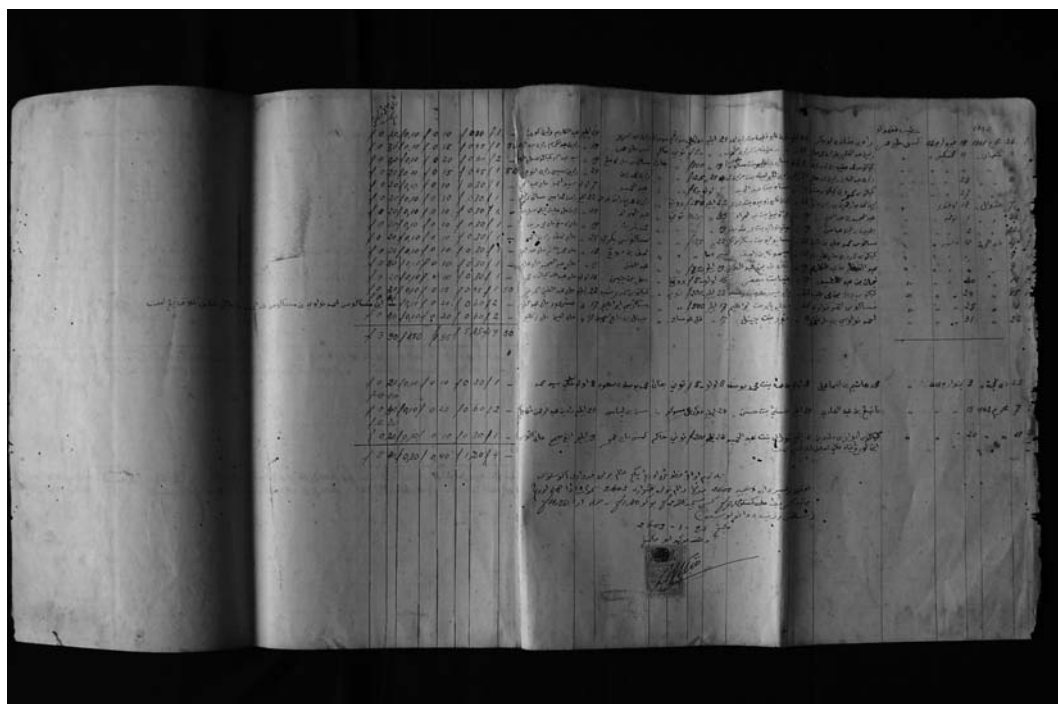
ていた人物はパレンバンの宗教役人の子孫であるキマス・アンディ・シャリフディン (Kemas Andi Syarifuddin) 氏で、約60冊の写本を所有していた。彼の家には、宗教写本だけでなく、メッカとの書簡、婚姻登録帳、婚姻・離婚届など、宗教役人であった彼の祖父が残した書類や写真が所蔵されている。また、スルタン・バダルディンの子孫であり、パレンバンの現スルタン (2003年調査時にスルタンに就任) であるラデン・ハジ・ムハンマド・シャフエイ・プラブ・ナタディラジャ (Raden Haji Muhammad Syafei Prabu Natadiraja) 氏も、スルタン家に伝わる多くの写本を所有していた。他には、アラブ人や宗教寄宿塾の教師が代々写本を受け継いでいた。彼らの所有する写本には、イスラーム関連写本以外に、歴史書、物語、系譜、書簡、詩歌、薬学書などがあつた。パレンバンにある州立バラプトラ・デワ博物館 (Museum Balaputra Dewa) もわずかながら写本を所蔵していたため、ここにあつた写本についても記録をとった。地方の博物館の場合、専門家不足のために、正確なデータ収集がなされていないことが多いため、博物館側も快く許可をしてくれた。個人で所有されている写本は、アラビア文字で書かれた18～19世紀のものがほとんどであつたが、博物館に保管されていた写本には、イスラーム浸透前のテキストが何点か見受けられた。

2004年末に、上記の調査結果をもとに、パレンバン写本のカタログを編集し、出版した (史資料ハブ地域文化研究拠点のホームページでCOE出版物情報が入手可能。URL: <http://www.tufs.ac.jp/21coe/area/index-j.html>)。主編者はYANASSA会長 (当時、MANASSAの会長でもあつた) アハディアティ・イクラム (Achadiati Ikram) 氏、共同執筆者は調査参加者及びその他のYANASSAメンバーである。カタログ執筆形式は、従来型の簡単なカタログと異なり、写本1冊1冊について、かなり詳細なデータが文章形式で載せられている。分類は、天文学、言語、祈祷、イスラーム法学、ハディース、ヒカヤット、イスラーム神学、薬学書、占い、コーラン、歴史書、系譜、書簡、詩歌、イスラーム神秘主義、ワヤン (影絵芝居)、その他となっている。なかでも、イスラーム法学、イスラーム神秘主義、書簡が最も数が多い。特に、法学と神秘主義のテキストが共に数が多かつたことが興味深い。ワヤンはジャワ起源であるが、登場人物の名前にパレンバンの王家の称号がつけられ、現地化されていた点に、YANASSAメンバーは関心を引かれていた。言語はアラビア語及びマレー語、文字は博物館に保管されていた数点を除き、すべてアラビア文字で書かれていた。

また、2004年には、上記のとおり、MANASSAパレンバン支部を中心にデジタル・カメラによる写本の写真撮影がおこなわれ、カタログに収められている写本の一部のデジタル化を進めた。現在は、その写真の加工をおこなっている段階である。今後は、デジタル写真のCD・DVD保存、写真のウェブへの掲載、カタログのデータ・ベース化を順次進めていく予定である。CD・DVDは東京外国語大学、ジャカルタの国立図書館、及びパレンバンのMANASSA支部に保管し、各機関での閲覧を可能にしてもらえるように交渉中であるが、一部の写本についてはウェブ上での検索・閲覧を可能にし、研究者が各自でより容易にアクセスができるように整備する予定である。



1. ワヤン

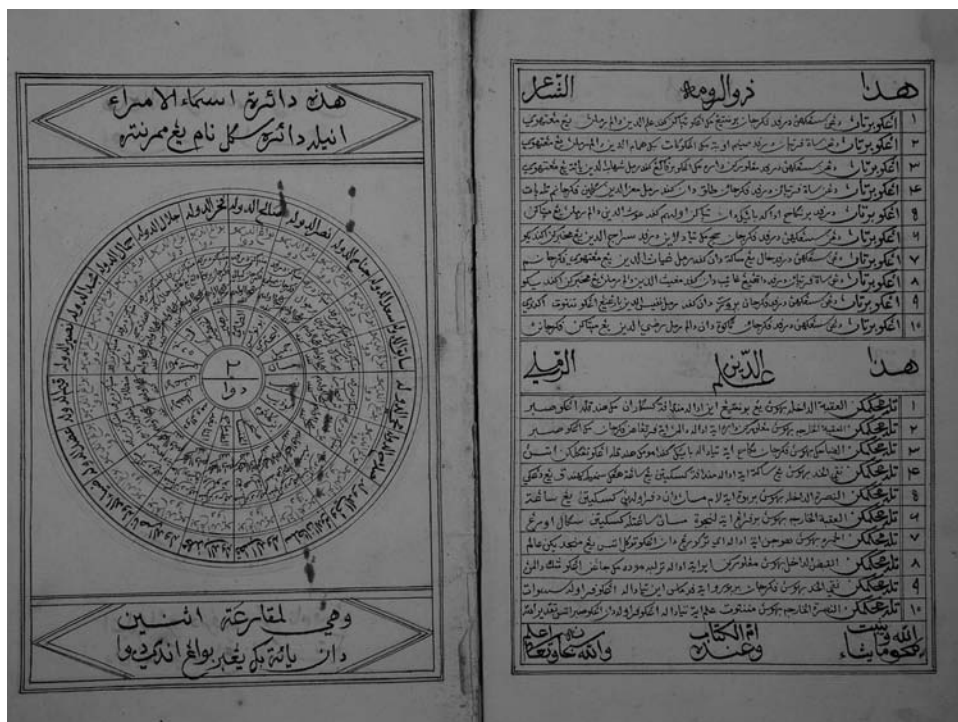


2. 婚姻記録帳





3, コーラン



4, プリンボン

## 2. ミナンカバウ写本

インドネシア、スマトラ島西部に位置するミナンカバウ地域でも、2003年より写本の調査をおこなっている。当地での調査者は、パダンにあるアンダラス大学文学部（Universitas Andalas, Fakultas Sastra）講師が結成する写本調査チーム“Kelompok Kajian Puitika”である。この調査チームは、文献学者だけでなく、アンダラス大学の地域文化研究や歴史学の講師及び文献学を専攻にしている学生から構成されている。この調査チームのリーダーであるユスフ（M.Yusuf）氏はMANASSA会員であり、かつてオランダで文献学を修めてきた人物である。ミナンカバウという地域一帯で写本を探すという作業は、パレンバンのような小都市で探す以上に困難なことであるが、彼らはすでに長年この地域での調査を独自に細々と進めてきていた。ただし、カタログ作成にまでは至っていなかった。彼らは特にスラウ（イスラーム寄宿塾）や古い伝統家屋を集中的に訪問し、情報を収集していた。写本によっては、所有者にとって家宝であるために、一度訪問しただけでは閲覧を許可されない場合も多く、時には儀式に参加してようやく調査を許されるということがあるため、かなり時間と忍耐が必要とされる調査であると言える。

ミナンカバウ文書は、主要なコレクションとしては、すでにオランダのレイデン大学附属図書館に261点、インドネシア国立図書館に78点が保管されているが、民間に眠っている写本はまだ数多く、特にスラウの写本は手付かずのままになっている。多くはパレンバン同様、イスラーム関連の写本であるが、他に系譜、旅行記、歴史、法令（tambo adat）、詩歌（pantun）、薬学書、予言書などが存在する。また、土地の質入書、ワカフ証明書、遺書などを目にすることもあった。また、写本の所有者は、概ねスラウ・タレカット（surau tarekat）の管理者であり、かつては宗教活動のなかで使用していたが、現在ではごくわずかなスラウを除き、これらの写本は使用されていなかった。他には、王族の子孫が系譜等を所有し（インドラブラ王国（Kerajaan Inderapra）のケース）、伝統的家屋の所有者が土地関係の書類を保管していた。使用言語はマレー語、ミナンカバウ語及びアラビア語で、文字はアラビア文字であった。本調査で記録をとった写本数は約200点。調査地は、タラム（Taram）、アンパル（Ampal）、マトウル（Matur）、シンカラック（Singkarak）、タンディケック（Tandikek）、ルナン（Lunang）、パセバン（Paseban）、クアラ・ニウル（Kuala Nyiur）、バタン・カブン（Batang Kabung）、パラック・ピサン（Parak Pisang）、バトウ・ハンパル（Batu Hampar）、パレンバヤン（Palembayang）、シンパン（Simpang）、アウル・ドゥリ（Aur Duri）、パダン・パンジャン（Padang Panjang）、アライ（Alai）、バトウ・サンカル（Batu Sangkar）、サシンド（Sasindo）であった。パレンバン同様、博物館所蔵の写本も調査対象とした（西スマトラ・アディタヤワルマン博物館 Museum Adityawarman Sumatera Barat）。

C-DATSとの共同調査は2003年に始まり、2004年まで2年継続した。調査手法及び収集データは、パレンバン調査とほぼ同様である。ただし、地域文化研究者が同行していたため、社会における写本の機能についても同時に調査をおこなっていた。2004年の調査には、デジタル・カメラによる写真撮影も平行しておこなわれた。この写真も、現在、加工とCD・DVD保存作業

をおこなっている。今後、パレンバン写本同様、ウェブへの掲載、カタログのデータ・ベース化を進めていく予定である。また、カタログは現在、編集中で、今年度中に出版する予定である。編集方法はパレンバンのものとは少し異なり、写本は内容の分野ではなく、地域による分類がなされ、写真が多く掲載される予定である。

パレンバンとミナンカバウ写本調査の成果は、2004年に、ジャカルタのインドネシア国立イスラーム大学社会イスラーム研究所 (Pusat Pengkajian Islam dan Masyarakat, Universitas Islam Negeri: PPIM-UIIN)、MANASSA、C-DATSとの共催で開催した写本国際シンポジウムで、その一部が発表された。このシンポジウムは、毎年インドネシア各地で、持ち回りで開催されているインドネシア写本学会の国際シンポジウムをベースにしたものであるが、2004年は、文献学者だけでなく、写本を利用する他の専門分野の研究者をインドネシア国内外から招待し、写本分析の方法論について議論をおこなった。この会議でのパレンバンとミナンカバウにおける写本調査の成果発表は、各地の写本の現状と調査状況を研究者に明らかにしたが、それだけでなく、調査が二箇所で行われたことにより、今後詳細な比較を通じて、スマトラ島全体における写本の傾向・流通の実態をさらに解明することが期待された。また、これにより、インドネシア各地の未調査地域での調査の必要性も喚起され、デジタル化などの新技術の導入により、国際協力体制を視野にいった、さらなる写本研究の進展が目指されることとなった。写本はこれまで、歴史的価値が見出しにくいことから、文献学者以外の研究者からは等閑視されてきた。しかし、地方の歴史、さらにはインドネシア・マレーシア地域全体の歴史を執筆する上で、植民者側ではなく、現地側からの視点として、一つの重要な史料になることが予想される。上記二件の写本調査プログラムの成果が、インドネシア研究者によって十分容易に利用できるような状態に整備していくことが今後の課題である。

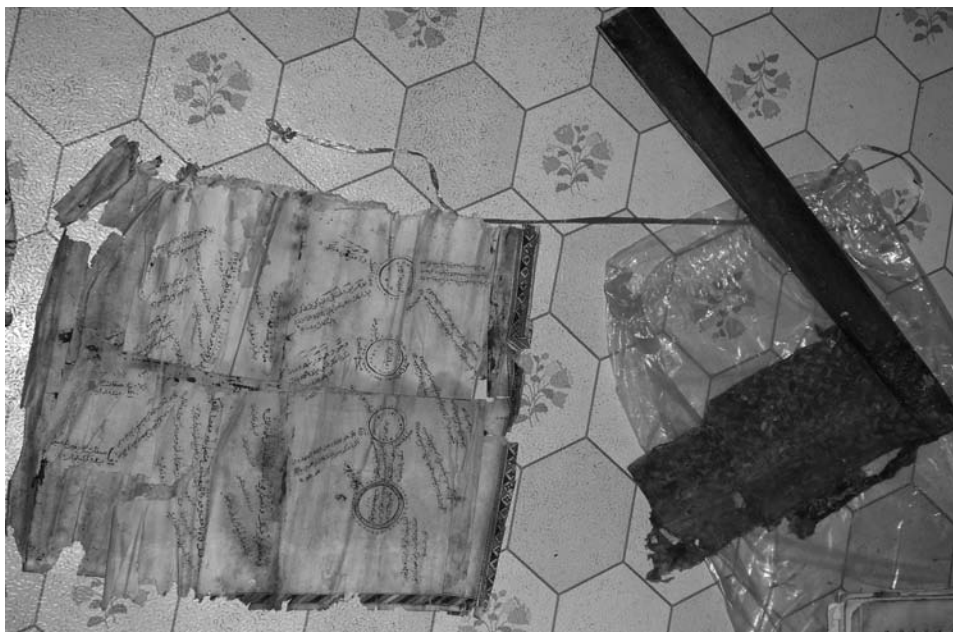
[illegible]

## 5. イスラーム寄宿塾の敷地のワカフ証明



## 6. メツカ巡礼記





7, イスラーム神秘主義の写本



8, インドラブラ王国の系譜